

洗ひ筆

能村 研三

見ずして逝けり

月光にくまなく晒す洗ひ筆

星月夜汀の砂の固緊まり

荒海の抜き身光りの秋刀魚買ふ

一茎のひとくねりして貴船菊

長き夜の二尺四方の居職の場

無聊の夜机辺の胡桃艶を増す

筆立てにささりしままの秋扇

板の間に蹠親しき今日の月

秋瀑の白き音色を奏しけり

露の玉はしる力を葉にためて

大冊三百六十頁に及ぶ五十周年記念号が出来上がった。ゲラの段階では校正紙は見ていたものの、実際に手にするといささかの興奮を覚えた。編集長をはじめ発行に携わった方々のご苦勞に心より感謝したい。中でも「沖の源流」の企画は五十年の歴史の中で多くの沖人の人となり蘇ってくるので読んでいても楽しかった。

もう一つの企画で現在の沖人による「私の大切な一句」には同人、会員が多く参加して下さった。

コロナ禍により句会等で多くの人の触れ合いが出来ない中、時間の経つのが早く感じられたが、この半年の間に、佐藤みほさん、菅谷たけしさん、熊倉松太さん、秋葉雅治さん、浅野吉弘さん、測上千津さん、梅村すみをさんの七名の同人の方が亡くなられた。

次の四名の方からは「私の大切な一句」にも原稿を寄せていただいたが、掲載紙を見ることなく亡くなられてしまった。

まつすぐに立たせて洗ふ聖夜の子
菅谷たけし
菅谷たけしさんは、五年前の四十周年記念事業では実行委員長とし

て細部にわたってご尽力下さり、五十周年へ向けての布石を築いていただいた。

北回歸線近き地ときにさくら藥

秋葉 雅治

秋葉雅治さんは、一時大手百貨店の美術部におられたので芸術文化に對しての造詣が深く、句会で批評も的確で私たちも勉強になった。

あふれ出す越の雪代つむぎ機

測上 千津

「沖」創刊立志八十八人のお一人で、私は十代の頃からお目にかかり、登四郎が地方に出かける時は一番の側近としてご一緒して下さいました。

いのちとはかくもしづかや冬ざくら
梅村すみを

梅村すみをさんは山口県におられて、福岡、山口地区で女界支部を立ち上げられ支部活動に尽力された。東京赴任時代では多くの句会でぜひご一緒して下さいました。

皆さんにそれぞれたぐさんの思い出がある。五十周年を前に旅立たれてしまったのは残念でならない。心よりご冥福をお祈り申し上げたい。

合掌

能村 研三